

授業課題に対する電子図書館活用状況に関する一考察
 - 青山学院大学社会情報学部をケーススタディに -

A Study of the Utilization of E-library in Report Writing
 -A Case Study of Aoyama Gakuin University School of Social Informatics-

上野 亮†
 Ryo Ueno

飯島 泰裕†
 Yasuhiro Iijima

1. はじめに

近年、大学図書館において、電子図書館を導入する事例が見られる。ここで言う電子図書館とは、PC やスマートフォンを通じて、デジタルデータで作成・出版される電子書籍の検索・貸出・返却・閲覧を可能にするサービスである(株式会社図書館流通センター、2018)。

青山学院大学社会情報学部では、2013 年度より、多読教育のために電子図書館を活用している。近年では、PBL 型授業における学生たちの発表資料、発表時の録画映像、プレゼンテーション時のポイントをまとめた動画等も、電子図書館に掲載することで、プレゼン教育への活用も試みている(飯島他、2018)。

しかし、従来の新書等を中心に扱う電子図書館だけでは、専門的な内容を取り扱う科目での活用がし難かった。特に、書籍を活用した大学教育の中では、特定のテーマの体系化したサーベイ、それに対する自分の考えの整理も必要である。そこで、ある授業において、学生に対して、複数の電子書籍を読み、その内容を受け、自分の考えを整理するという授業課題を課した。この際に、学術書や専門書を中心に扱う、新たな電子図書館「KinoDen」を活用した(株式会社紀伊國屋書店 電子書籍営業部、2018)、(図 1 参照)。本研究では、この授業課題に対する、学生の電子図書館活用状況を分析した結果について、報告する。



図 1 電子図書館 KinoDen の蔵書検索結果

2. 電子図書館を活用した授業課題

今回の課題を解く際に利用させた電子図書館である、KinoDen には、電子書籍本文の全文検索機能、必要個所の PDF 出力機能といった、レポート作成をアシストしてくれる機能が揃っている。一方、学外からの利用は前提として

いない。なお、2019 年 5 月時点では、クラウド型電子書籍リーダーの本棚機能を使えば、学外からも閲覧可能になった。また、各電子書籍への同時アクセス数は 3、もしくは 1 である。

今回、この電子図書館の活用を前提とした授業課題は、2 年生以上が履修可能である専門科目「ネット社会とコミュニティ」の最終レポートにおける、問題の一つという形で課した。その他、課題内容の詳細は表 1 の通りである。本研究では、この授業課題実施時期の電子図書館利用ログ、課題を課した学生へのアンケート調査の結果から、レポートに対する、学生の電子図書館活用状況を分析する。

表 1 授業課題の内容

対象	・社会情報学部 2~4 年生が履修可能な専門科目「ネット社会とコミュニティ」の履修者 68 名
課題期間	・課題提示：2018/12/19 ・提出締切：2019/01/22 (累計 35 日間)
課題書籍	・遠藤薫編著『インターネットと〈世論〉形成』、畑仲哲雄著『地域ジャーナリズム』等 ・ネット社会に関係する専門書 12 冊
課題内容	・指定された課題書籍を参考に、ネット社会の将来像について考察した結果を A4 用紙 1P 程度で整理する ・ただし、レポート作成時は、複数の課題図書を確認する必要有り

3. 利用ログデータから見る電子図書館活用状況

電子図書館の活用状況を把握できるデータとして、システム上に記録される利用ログデータがある。このデータには、書誌ページや書籍データの閲覧状況が分かる「閲覧情報」、検索に使われたキーワード等が分かる「検索情報」が記録されている。「検索情報」は、検索後、所蔵状況別の結果に切り替えたり、出版年等でソートした場合、検索結果が複数ページに渡る際、次ページに移行した場合に記録が残る。なお、KinoDen では利用者の学籍番号等、個人を特定できる情報は取得できない。そのため、利用ログデータには、課題対象者以外の利用ログも含まれている。

この内、「閲覧情報」に記録されている、書誌ページ閲覧回数を見ると、課題期間中の総計は 235 回であった。日付別の集計結果を見ると、最も閲覧回数が多い日は「2019/1/21(月)」で 43 回、次いで「2019/1/22(火)」が 41 回、「2019/1/9(水)」が 24 回の順となった(図 2 参照)。傾向としては、課題期間終了直前に閲覧回数が増加している。そのため、学生達は、長期間に渡り、複数の課題図書の内容を確認するのではなく、課題期間終了直前に、集中

† 青山学院大学 社会情報学部 Aoyama Gakuin University School of Social Informatics

して、電子図書館を活用し、課題に取り組んでいると考えられる。

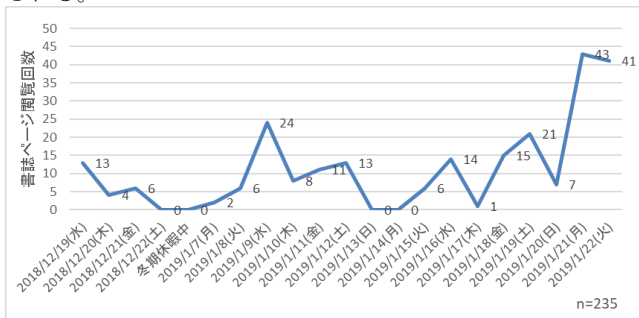


図2 課題期間中の書誌ページ閲覧回数

続いて、「検索情報」のデータを見てみると、検索結果がよく見られているキーワードは「インターネットと〈世論〉形成」が314回で最も多く、次いで「メディアは大震災」が268回、「メディアは大震災・原発事故をどう語ったか」が206回の順であった(表2参照)。傾向としては、課題図書の本名やその一部をキーワードとして、検索されている。一方、「検索情報」を見る限りでは、専門用語をキーワードとして、横断検索をするといった活用をしている様子は、ほとんど伺えなかった。そのため、学生達の電子図書館活用方法は、その機能を十分に活かす段階には至らなかった。

表2 検索キーワード別検索結果ページ表示回数 (上位10キーワード)

順位	検索キーワード	表示回数
1	インターネットと〈世論〉形成	314
2	メディアは大震災	268
3	メディアは大震災・原発事故をどう語ったか	206
4	情報社会とデジタルコミュニティ	181
5	(空検索)	115
6	ウェブユニバーサルデザイン	108
7	ウェブ	78
8	篠原弘道	77
9	インターネットと世論形成	45
9	ネットメディアと〈コミュニティ〉形成	45

4. アンケート調査から見る電子図書館活用状況

実際に課題を解いた学生を対象に、今回利用した電子図書館に関して、アンケート調査を行った。その結果、31名の学生より回答を得られた(回収率45.6%)。今後、電子図書館の蔵書数が増えた場合における、レポートや論文作成等への利用意向は「利用したいと思う」が16人(51.6%)に対し、「あまり利用したくない」「利用したくない」は計11人(35.5%)となった(図3参照)。結果としては、電子図書館への評価は、賛否が二分していた。

そこで、不便さを感じている点について確認すると、「開きたいページ(読み返したい箇所)がすぐ開けない」が25人(80.6%)で最も多く、次いで「大学からしか利用できない」が22人(71.0%)の順となった(図4参照)。レポート作成時には、重要な箇所を行きつ戻りつしながら、本を読むことは十分考えられる。そのため、教育用の電子図書館として活用するには、リーダーを改善し、必要なペ

ージがすぐ開けるような仕様へと改善することが必要となる。なお、大学からしか利用できない点は、本稿作成時点では、クラウド型電子書籍リーダーの活用により、解決している。

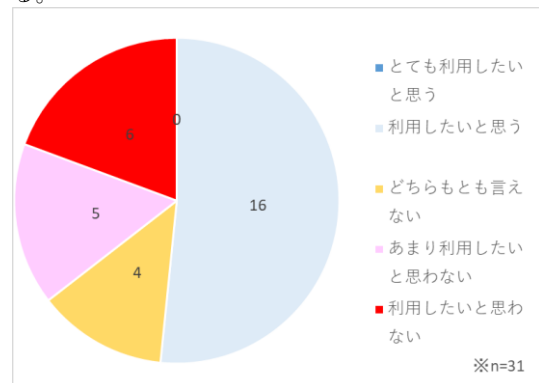


図3 今後の電子図書館利用意向



図4 電子図書館の不便な点

5. おわりに

本研究では、学生の授業課題に対する電子図書館の活用状況について分析した。その結果、多くの学生は、電子図書館の機能を十分に活用できる段階に至っていないこと。学生の電子図書館への評価は、二分している点等を把握できた。今後は、学生に対する、電子図書館の使い方に関する教育も含め、大学教育への電子図書館活用方法のあり方について、研究していきたい。

謝辞

本研究で活用した電子図書館の導入に当たり、株式会社紀伊國屋書店、青山学院大学万代記念図書館の皆様にご協力頂きました。ここに感謝の意を表します。

なお、本研究は青山学院大学社会情報学研究センターによる研究プロジェクト「電子図書館を活用した多読教育およびプレゼン教育の研究」及び科学研究費基盤研究(C)「深い学習を促すデジタル教材—学習方略の選択への介入—」の成果の一部です。

参考文献

- [1] 飯島泰裕, 寺尾敦, 上野亮, “電子図書館を活用した多読教育およびプレゼン教育の研究”, 青山社会情報研究, 第10巻 pp.73-77 (2018).
- [2] 株式会社紀伊國屋書店 電子書籍営業部. “紀伊國屋書店 学術電子図書館 KinoDen”. 紀伊國屋書店 学術電子図書館 KinoDen - Kinokuniya Digital Library. <https://www.kinokuniya.co.jp/03f/ebook/kinoden/index.html>, (参照 2019-05-19)
- [3] 株式会社図書館流通センター. “電子図書館サービス 人と資料をつなぐために”. 株式会社図書館流通センター (TRC) Webサイト. <http://www.trc.co.jp/solution/trcdl.html>, (参照 2019-05-17).